ウワナベ古墳　箸墓と同規模か

墳丘長270メートル超　奈良県など調査

奈良市の前方後円墳「ウワナベ古墳」の墳丘の長さが270メートルを超えることが判明した。発掘調査した奈良県と市教育委員会が20日、発表した。ウワナベ古墳は天皇や皇族の墓の可能性がある「陵墓参考地」。卑弥呼の墓との説もある奈良県桜井市の箸墓古墳（墳丘長約280メートル）と同規模の可能性があるという。

ウワナベ古墳は5世紀前半に造られたとされ、墳丘長はこれまで255メートルと考えられてきた。大型前方後円墳が集まる佐紀古墳群にある。今回の調査で、古墳群最大の五社神古墳（同267メートル）を抜いて、全国12位の大きさになるとみられる。

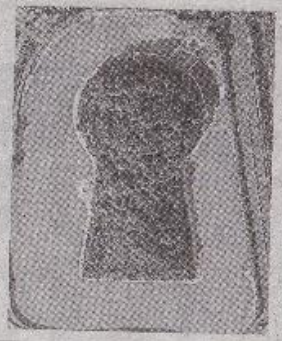
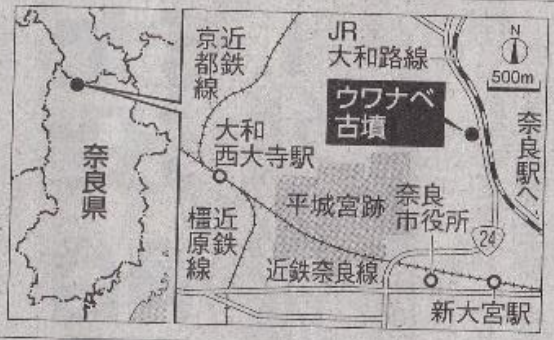
今回の調査は、宮内庁、県、奈良市教委の3者が初めて同時に行った。県立橿原考古学研究所（橿考研）と市教委は10月から後円部北東側で、普段は水がたまっている周濠（堀）の水位を下げて調査。深さ約3メートルの地層から墳丘下段（1段目）の裾部が発見された。この結果、後円部の直径が約20メートル大きくなり、墳丘長も270～280メートルになるとみられる。

後円部北東では、周濠の底から大量の石が出土。橿考研によると、人工的に敷き詰められた可能性があり、周濠から敷石が発見されるのは例がないという。

宮内庁もこの日、墳丘の裾部13カ所での調査結果を発表。後円部北側などで、鰭付円筒埴輪の列や直径10～15センチほどの葺石などを確認した。

現地を見た今尾文昭・関西大非常勤講師（日本考古学）は「本来の墳丘裾が確認できたことは大きな意味がある。倭の王権の墳丘が、百舌鳥・古市古墳群と同様に前方部が発達していたことの確認につながる。埴輪も丁寧に配列されていることも確かめることができた」と話した。

（清水謙司、渡辺元史）



ウワナベ古墳＝17日午後、奈良市法華寺町、本社ヘリから、柴田悠貴撮影